

# 天気の子 — Pretender —

マネ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

天候の調和が狂いはじめた時代。魚を象った雨（レイニーフィッシュ）が降っているというツイッター投稿に興味を抱いたミステリ系ユーチューバーのアスタは相棒でカメラマンのユノとこの謎に挑んでいく。

天候の調和はなぜ狂ったのか？ 世界に突如現れたレイニーフィッシュとは？

みえない敵との頭脳戦にアスタは勝利できるのか？ キラゲーム編開始。

未投稿『アスタ VS 工藤新一』の対になる物語です。タイトルは別。こちらは名探偵コナンが原作です。本作と並行して投稿予定です。

Pretenderってどういう意味なんだろう？ その運命を打ち破れ。

前作『君の名は。再演す』より長くなりそうです。全八章です。2ヶ月で一章を書いて、1年くらいで完結できたらと思っています。

### ※注意点

殺人描写など暴力的描写もあります。予想外のスペックをみせるキャラもあります。ファイナルファンタジーX-2を想起させるシーンがあるかもしれませんが。動画を視聴するといふかなり複雑な構成になっています。

## 目次

第一章 「風が僕らの前で急に舵を切ったのを感じた午後」

R a i n y F i s h

1

K I R A G A M E

10

# 第一章「風が僕らの前で急に舵を切ったのを感じた午後」

## R a i n y F i s h

「はい、どうも。こんにちは。アスタです。今回なんですけども、ツイッターでひそかな話題になっているレイニーフィッシュについて調査していきたいと思います」

俺はテーブル越しで、相方のユノが構える小さなカメラに向かって語りかける。

「レイニーフィッシュって、ユノ、知ってる？」

「きいたことないな」

ユノは台本通り答える。

「えつとお、レイニーフィッシュについてはユノから聞いたんですけども」

俺はカメラに笑ってみせる。

「そういうの知らないから。知らないってテイのほうがおまえも進行しやすいだろ」

「まあな。ツイッターとかで話題にあがってるんですよ。魚の形をした雨が降っているって」

「魚の形をした雨ってどういうこと？ イメージつかないな」

「動画をみたほうが早いので、ちよつとみてみましょうか」

俺はテーブルの上のノートパソコンを回転させる。

「こちらです」

俺が指差したモニターに、ユノはカメラを向ける。

「ちよつとモニター、みえない」

俺はテーブルの上に身を乗り出して、モニターを確認しながら、マウスを動かす、動画を再生させる。

モニターの中で雨が降っている。

動画が撮られた場所は大通りを一本入った裏道。エアコンの室外機が並んでいる。空き缶も転がっている。アスファルトには水たまり

りができていて、雨粒がアスファルトの水たまりに飛び込んで次々に波紋を作っていく。まるで、水の花火だ。

「ごっ、よくみてて」

俺はモニターの中の水たまりを指さす。

動画の中のカメラがゆつくりとその水たまりにズームしていく。

水たまりから、何か跳ねた。カメラのピントがあっていない。ただ何か跳ねているのがわかる。少しずつカメラのピントが合っていく。魚が跳ねたようにみえる。浅い水たまりの中に魚がいるようにみえる。そんなありえない映像だった。

「この水たまり、深いのか？」

ユノは台本通りのセリフをつぶやく。

「なわけないだろ。底のアスファルトがみえてるだろ」

「だよな」

小指の先ほどの魚のようなものが深さ1cmもない水たまりを泳いでいるようにみえる。浅くて泳げるわけがないのに。

「それは謎の飛行物体スカイフィッシュになぞらえて名付けられたらしい。だから、俺たちもそれにならって、こう呼んでいる。雨水の魚。レイニーフィッシュと」

わずか30秒間の動画だった。

「僕たちはこれまで、学校の七不思議シリーズ、都市伝説シリーズなど、ミステリー系ユーチューバーとして、そういったミステリーを解き明かしてきました。今回は雨水の魚レイニーフィッシュ。この正体を突き止めていきたいと思います」

俺は立ち上がった。

「さあ、行くぞ。ユノ！」

「どいどい？」

「えっ!?! もしかして……………いきなり詰んだ？」

THE END

「いやいやいやいや、おい、アスタ、さすがにこれで終われないだろ」  
「ユノ、どうする?」

「この動画を撮った人に会いに行くとか?」

「実は、レイニーフィッシュの動画を撮った人の中で、ひとりアポが取れたんで、昨日、ユノと二人で、この動画を撮った人に会いに行ってるんですよ。そのとき、レイニーフィッシュの動画をこのチャンネルで使ってもいいという許可も取りました。大がかりなヤラセの可能性があるんで、ツイッターの投稿者の共通点とか、いろいろ入念に下調べをして行っただけです。でも、なかなか投稿者の共通項が出てこない。投稿者の聞き取りもしてきました。結果は……成果は……」

そこで俺は言葉を区切る。

「ありませんでした。もしこれがヤラセなら、この投稿者から黒幕に行きつけるはずなんですけど。突き崩せなかった。もしくは見当違いのことをしているのか」

「今の段階じゃ、黒幕には行きつけない。何か、べつのアプローチが必要だな」

「昨日までに、雨と魚を連想させる単語をネットで検索したんですけど、雨の日の魚の釣り方とかしか出てこなくて。その中で気になるものがひとつあったんです。Yahoo! 知恵袋に。雨の日に水の魚をみました。これって何なんでしょうっていう質問」

アドリブだ。

「……何も気になるところなんてないだろ? その質問のどこに気になるところがあるんだ?」

「注目すべきは質問の内容じゃなく、その投稿日だよ」

「投稿日?」

俺は人差し指と中指を立てる。

「二年も前のものだった」

ユノの目が泳ぐ。ユノは俺の言葉にときどきこっぴどくいう反応をする。

「……ヤラセにしては時間をかけすぎてるな」ユノは一呼吸おいて言った。

「一概に、時間をかけすぎだからヤラセではないってはいえないけどな」

「だけど予算の取り方だってこれじゃ難しいだろ。二年もかける意味を説明できるか？ 期をまたぐなんて、事務的にさ」

「事務的に？ ちよつとなに言ってるかわかんない」

「あ……そう」

「でも、これはヤラセだと思う。こんな生き物が実在するわけがないし。問題は誰が？ 何のために？ そして、何より、なんで、こんなにも長い時間をかけてつてところだな」

「確かに、この時間のかけ方は気になるよな。普通の感覚じゃない。そんなことよりも、これ以上の調査は無理じゃないか？ アポが取れた唯一の投稿者から何も手がかりが出てこなかったわけだし、手がかりはもう……」

ユノが台本通りに立て直してきた。

「手がかりはあるよ」

「どこに？」

「ここに」

俺はモニターを差す。

「このツイッターの動画や画像データだよ。データにはいつ撮ったのか？ どこで撮ったのか？ そういった情報が保存されている。それらのツイッター投稿をピックアップして、時系列でマップにプロットしていく。何か規則性がみえてくるかもしれない。ユノ、これはセオリーの範囲だよ」

「ああ、なるほど。それでこの現象が雲みたいなのに、どこから来て、どこへ行くのか、天気図みたいにわかるわけだ」

「そういうこと。ユノ、俺もちゃんと考えてるんだって。俺たちミステリ系ユーチューバーだから。推理力が、ここが武器だよ」

俺は頭を指さす。

「日本以外にもあるのかな？」

「それも調べてみようぜ」

もちろん、調べてある。全世界で検索するも、日本以外には出てこ

なかった。

「どうやら日本だけだな。しかも、日本の一部の地域だけ」と俺。「と  
いっても範囲が広すぎる。ツイッターアカウントから辿って、黒幕を  
突き止めて、ヤラセを自白させようと思っただけ、そう単純なもの  
でもないみたいだ。これだけの人数を口止めするのは難しいし。  
なんなんだ、これ。組織的犯行なら……」

こんな大規模な事件で、組織的犯行なんて考えられない。管理し切  
れないはずだ。

「まるでデスノートのキラ事件みたいだ」

「ああ、なんかメッセージ性を感じるな。姿がみえない存在との頭脳  
戦。アスタ、なんかワクワクしてくるな」

「デスノートでは探偵役が死ぬよな？ 俺、死ぬの？」

「変なフラグを立てるなよ。アスタ、相手が俺たちより頭が良かった  
ら、どうする？」

「それは想定してない。俺、俺より頭がキレるヤツに会ったことない  
から」

「はい。決め台詞いただきました。いちおう、アスタはこのチャンネ  
ル内ではそういうキャラクター設定になっています。コラボ時はボ  
ロが出る可能性があります」

「意味不明な説明を入れるなよ。べつにキャラ設定でもブランディン  
グでもないし」

「なんで2回同じこと言った？ それでアスタ、このシリーズの最終  
目標は？」

「最終目標？ もちろん、レイニーフィッシュの捕獲だよ。キャッチ  
&リリース！」

「ガチ？」

「というわけで、今回はこの辺で。次回はピックアップしたデータを  
解読していききたいと思います。おもしろかったら、チャンネル登録、  
高評価、よろしく願います。ありがとうございました」

俺は伸びをする。

ユノはまだカメラをまわしている。

動画の撮影はユノが借りている部屋で行っている。以前は俺の部屋で撮っていたが狭く、ユノが動画撮影用にわざわざ大きな部屋を借りたのだった。一人暮らしをはじめるとユノがユノの親に言っただけで、大きな部屋ということもあって、俺はユノの部屋に泊まるが多かった。

「マップにプロットか。面倒くさいな。位置情報と撮影日確認で、画像データの解析もあるよな？　こういうデータ管理、苦手なんだよな」

「アスタ、理系がそれを言うなよ」

「俺、自分が理系だとは思ってないから」

「カツコ良さげに言っても、ぜんぜんカツコ良くないから」

「ノエルにやってもらおうぜ。リケジョの。アイツ、こういうの得意だし。アスタチャンネルの3人目のメンバー」

「アイツにリケジョって言うと怒るぞ」

「怒らせようぜ」

「悪そうな顔だな。おまえって怒ってる女子、好きだよな？」

「そんなヤツいないだろ。小学生かよ」

「言ってることとやろうとしてることと、速攻で矛盾してるぞ」

俺はさっそくケータイを手にとった。

「ノエル……ノエルつと……」

「アスタあ、聞こえてますけどお」

ノエルがユノの肩をゆする。

「カメラが揺れる」

「ノエル、出てくるの早いつてー！」

「そんなの知りませくん。台本、もらってませくん」

「おまえ、台本通りできないじゃん」

「アスタだって、すぐアドリブ入れるってユノ君が嘆いてたよ。それにあなたたちがあたしのアドリブに合わせるべき！　ていうか、あたしって3人目のメンバーだったっけ？」

ノエルが小首をかしげた。

「数え方にもよるね」

ユノが小さく呟いた。

「それよりも、ノエル、その猫耳はどうしたんだ？」

「似合う？ アスタがつけろって」

ノエルは顔の上半分を仮面で隠している。父親がきびしく、こういう活動が禁止されている。ユノもカメラマンなので、基本的に動画に顔が出ることはない。顔出しは俺だけだ。

「ノエルが次の動画から出れば違和感がなかったんだよ」

「この動画の流れで、猫耳が違和感ないって、どんな展開だよ」

「にや〜にや〜」

ノエルはみえない何かと戦うように構えている。



「はい、どうも。夜ですが、改めまして、こんにちは。アスタです。動画のご視聴ありがとうございます。ご心配もおかけしております」

俺はカメラに向かって、軽く頭を下げる。

俺はモニターを眺める。コメントが次々に流れている。俺は今、ライブ中だ。300人が視聴中となっている。かなり増えたな。マスコミもみているだろう。彼らもみているだろう。

まさか、生放送のドッキリ企画で使うはずだったトリックをここで使うことになるとは思わなかった。何時間、時間を稼げるだろう？

俺を心配するメッセージが流れている。説明を求めるメッセージも流れている。

「俺の表情は大丈夫？」

カメラマンがこくりとうなずく。本当かよ。ちゃんとアスタらしい表情を作れているのか、自信がない。

「いろいろあって、本当にいろいろあって、この都市伝説シリーズの動画についてはお蔵入りすることも考えたんですけど、これだけ世間を騒がせてしまったので、当事者の僕から説明が必要かなと思って、この動画をライブで配信することにしました」

嘘だ。

視聴者数は増え続けている。やっぱり注目度があるんだろう。

「今夜、今日までの件について、録画とライブで語っていききたいと思います。これが最後かもしれないので」

——最後つて？

「だから、ぜんぶ話しておきたいと思いました」

——FF？ FF10？

「ライブなので、もしかしたら、ショッキングな映像がうつってしまいかもしれません。そこは温かい目でみてください。僕も余裕がないので。それにこれを見てる人なら、ショッキングな映像は見慣れてるでしょ？ 申し訳ないですが、心臓が弱い人は今回は遠慮してください」

——煽り？

——ショッキングな映像ってアレ以上？

「映ったら映ったで、こんな動画を撮ってる場合かって、怒る人もいるかもしれません。本来、僕はこんなことをしてちゃいけない状況なので。……でも、最後の一手に、必ず必要になるので」

俺の目の前で、青白く輝く、半透明の人型の物体が揺らめいている。これが人の成れの果てか。

これをカメラの前に出したら、いったいどうなるんだろう？

何がおきるんだろう？

俺はまだ判断できずにいる。こんなとき……それは考えないことにしよう。

「このシリーズを終わらせられたら、俺は、自分がどうなってもいいと思っています。そういう覚悟を持って、この動画を撮っています」

左手に痛みが走った。表情がすこしゆがむ。

「真夏に雪が降るなんて、誰が想像した？　これから、そんなことがどうでもよくなるくらいの出来事がおきます。夏休み、この長い夜に付き合ってください。よろしくお願いします。では、動画2本目、どうぞ」

## K I R A   G A M E

「ノエル、時間は？　どれだけ待てばいい？」

「ん〜、そうだにや〜」

「にや？　なんかコントはじまったぞ。猫耳はコント用か？」とユノ。  
「足りないデータの補完も考えると、3、4時間あればいけそうだにや」

「足りないデータ？」

ユノがノエルのアドリブに反応する。俺とノエルはスルーする。

「ダメだ。待てない」

俺はノエルを睨みつける。

「1時間あれば……全体像が読み取れるデータは作れるにや」

「1時間、ここで待つ」

「オツケー♪」

「ここ以外にどこで待つっていうんだよ。ん？　なんかこのやり取り、どこかでみたことあるな」

俺は床に座り込む。俺は膝に肘を置く。じつとノエルを睨みつける。

「その座り方、そつか。ハンターハンターのゴンとピトーのやり取りか。だから、ノエル、そんな口調なのか？」

「そうだにや〜。ユノ君、漫画読むんだ？」

「アスタが動画のネタで使うから。ツツコミのためにね。それはともかく足りないデータってなんだ？」

「レイニーフィッシュの動向がぜんぶネットで確認できるわけじゃないから。補完は必ず必要になってくる。データをまとめるだけなら、誰でもできる。データは使えるようにまとめない」と

「それはわかるけど、そこまでの精度を担保するための基礎データを確保できるのか？」

「あたしを誰だと思っているのかにや？　王直属護衛軍がひとり。ノエルピトーだにや」

「そんな設定ないから。ネフェルピトーみたいに言うな」

「実際問題、補完できなければレイニーフィッシュを掌握することも、捕らえることもできない」

「アスタ、言うのは簡単だけど、超高難度だぞ」

「だから？　できないなんてことは想定してない」

「はい。決め台詞いただきました。これでできなかつたら、カツコつかないぜ」

「だから、それは想定してないって。このパーティーで不可能なら誰にもできない」

ユノはため息をつく。

「未来で、おまえの部下になる人材に同情するよ。おまえの要求にこたえられる人間なんて……」

「おまえらにだから言うんだよ。バカ」

「にやー！」

「……………」

ユノがどんな表情をしていいか困っている。



カタカタカタ……とノエルがキーボードを叩く音が室内に響いている。

「ノエル、まだ？」

「ま〜だ〜」

ユノはカメラを止めて、キッチンでお茶の準備をしている。ユノはお茶を入れるのがうまい。高校時代のバイト経験が活かされている。

俺は収集したレイニーフィッシュの動画をいくつか同時に再生させている。30秒、1分、3分。まちまちだ。横目に、ノエルの作業を眺める。さすがに作業が早い。センスもいいため、動画の編集はノエルに任せている。何をやらせても、かなりのレベルで仕事をこなしてくれる。ユノもノエルも将来有望だ。ノエルは少年っぽいというか、多少危なっかしいところはあるが。

俺はどうだろう？

ノエルの父さんから、ノエルの顔出し許可が得られれば、ノエルはこのチャンネルの大きな戦力になるだろうけど。ノエルの父さんにそのことを相談することそのものがかなり難しい。それに相談したとして、許可なんてまず降りないだろう。

チャンネル登録者数はようやく1500人を超えた。ここまで2年の時間を要した。想像していたより苦戦している。やっぱり、そう簡単ではない。飛び道具が必要になる。

「あれ？」

「どうかしたかにや？」

「なんでだ？」

「なにかにや？」

「カメラまわってないから、しゃべり方、普通でいいよ」

「にや！」

ノエルと目が合う。

「ネットにあがってるレイニーフィッシュの動画の再生時間をみてみるよ。多くが30秒前後なんだよ。長いのも少しあるけど、それはレイニーフィッシュが消えてからも撮ってるから。レイニーフィッシュが映ってる時間は俺が確認した限りでは100%、30秒前後」

レイニーフィッシュが消えてからも撮っていた動画があるから、気づくのが遅れた。

「そういうえばそうだね」

「でも、ツイッターには3分間そこにいたとか、5分間そこにいたとか、まちまちなんだぜ。なんで動画だけ30秒前後なんだ？」

「……変だね。おかしいね」

ノエルの反応にわずかなラグが発生した。ユノとちがって、ノエルはこんなことあまりない。

「すべての動画はレイニーフィッシュがいなくなるまで撮影している。レイニーフィッシュの出現シーンは撮影できてなくても、最後は撮影してるんだよ。つまり、レイニーフィッシュが消える30秒前から、すべての動画が撮影されはじめているということになる」

「カメラで観測することが観測対象者に影響を与えているってこと？」

「なんだか量子力学みたいだね」

「みたいじゃなく、そういうことだろ」

「どういうことなんだろう?」

「どういうことじゃなくて、どういう意味だぜ? これには意味があるってことだ」

「どういう意味?」

「30秒間だけ、撮影させている……?」

「意味がわかんないんだけど」

「俺だつてわかんないよ。ただ一つだけ確定したことがある」  
「なに?」

——これが自然現象じゃないってことだ。

30秒前後しか動画に映らない。これはあきらかなメッセージだ。

自分が人間であるという、メッセージだ。

自分とはなんだ?

誰に向けたメッセージだ?

——キラゲーム

「アスタ、顔色悪いよ」

「いろいろ考えたよ。アポが取れた一人だけが実在の人物で、あとは実在しないとかね。過去のツイートも今回のこの事件のために用意したフェイクとか。そこまでやれるやつがこんな初歩的なことを見逃すはずがない。というか、これはミスではなく、意図的だろ」

「これつてたしか案件だったよね? しかも、高額案件。ハンター試験みたいなものかな? あたしたちを試験するための。でも、あたしたちを試験する意味なんてないか」

「目的がわからない。クライアントも情報をくれないし、何もきかない、が条件だったし。とりあえず『キラ』をみつけるしかないな」  
「人が死なないデスノートみたいだね。アスタ?」

情報が矛盾だらけだ。わけがわからない。デスノートのLの気分だ。

「人が関わっているなら、その道のプロに依頼すればいい。なんで俺たちに依頼した？　もしかしたら、このシリーズは動画にしないかもしれないな」

「あたしはリーダーの指示に従うよ」

「これは俺たちの手に負える次元じゃないかもしれない」

「アスタ、カメラまわってない」

「まわさねえよ。こんなのアップできるわけないだろ。今夜、緊急ミーティングを行う」

「うん」

「ノエル、夜、男二人のところに残るかって質問にイエスって答えるなよ」

「だって、ユノ君にはカノジョいるし、アスタはどうでもいい女の子にしか興味ないでしょ？　ヘイキだよ。なんかあったら、アスタに責任とってもらおうし」

「どうでもいい女の子にしか興味ないとか、人聞きの悪い言い方をするなよ」

「事実でしょ？」

「まくた喧嘩してる」

ユノが紅茶をおぼんにのせて立っている。

「休憩しようぜ」

「ケーキ！　ケーキ！」

「そんなものはない！」

「そんなあ」

ユノがテーブルに紅茶を置く。

「アスタ、何かわかったのか？」

「レイニーフィッシュ生物説がなくなった。これは人為的な現象だ」

「この段階で？　これだけの情報で？　それはさすがに論理が飛躍しすぎだろ。いったい、どんな推理をしたんだ？　その推理を聞かせてもらおうか」

「休憩だ」

「あれ、1時間でやるって約束は？」

「あんなのコントだろ。編集編集」